



市読書感想文コンクール 市長賞受賞作品紹介

毎年開催している市読書感想文コンクールは、今年で55回目を迎えました。市内小・中・高等学校から寄せられた42編のうち、本号では市長賞を受賞した作品を紹介します。



★市長賞

「ちよう戦する気持ち」

高津小学校 5年

稲村 朋香さん

私は、おこなわ大会で、とびたくないと思つたことがあります。なぜとびたくないのだろう。そう思つてこの本を読み始めました。

この本の登場人物の一人、双葉は足にハンディがあります。双葉はおこなわ大会に出ないと宣言します。そうか、ハンディがあるからとびたくないと思つたのか。それなら仕方ないなと私は思いました。でも、双葉のクラスのみんなは自分の気持ちを伝え合い、どうすればみんなまで参加できるか考え、力を合わせておこなわ大会にちよう戦します。

私はこの本の中で、クラスのみんなが意見をおつけ合う場面が特に印象に残りました。双葉がおこなわ大会に出るかどうかを決めるとき、みんなが自分の本当の気持ちを言います。私にとつて、様々な意見があつた中で自分の気持ちを言うのは簡単ではありません。私はいつも、苦手なことは出来ないと思つて、最初からあきらめてしまふ。みんなの前で自分の不安な気持ちを見せたり、みんなの前で失敗したりすることをこわいと感じてしまふのです。

例えば、私は運動会のリレーが苦手です。なぜなら、バトンをおわたす時、もし落とすってしまったらどうしよう、みんなにめいわくをかけたらどうしよう、と失敗することばかり考えてしまふ不安になるからです。

おこなわ大会のルールについて話し合ううちに、実はクラスのみんなが意外な思いをかかえていたということが分かります。この場面も心に残りました。ふだんは元気で明るそうに見えても、実は不安でたまらなかつた子、失敗したくやしさを笑いにかえてごまかしていた子。双葉のように目に見えるハンディがなくても、それぞれにいろいろな思いをもつていて、それでも勇気を出してがんばっていたことが分かりました。もしかしたら、私のクラスにもそんな子がいるのかも。双葉のクラスのように、私のクラスでもみんなの思いを伝え合う学級会をしてみたいなと感じました。

おこなわ大会に出ないと宣言した双葉は、クラスのみんなと一緒ににおこなわをとびました。本番で失敗したのは、おこなわが得意な舞花。結果はたった四回の差で一組に勝つてませんでした。舞花はどうするのだろう、クラスのみんなはどう反応するのだろう。私はドキドキしました。舞花は自分のせいだと落ちこみます。

でも、クラスのみんなはそんな舞花を助け、負けたくれど心から楽しかったと笑顔を見せました。私ははつとしました。失敗は、はずかしいことではないこと。自分の弱さを受け入れてちよう戦することが大切だということ。このことを双葉や舞花、クラスの仲間から教わりました。

私も失敗をおそれず、みんなの応援や声援を力に変えて勇気を出せるようになりたいです。同じように私の応援で友達を勇気づけてあげたいと思います。私の学校でも、毎年おこなわ記録会が行われます。クラスのみんなで思いを伝え合い、笑顔でちよう戦できるといいな。

※読んだ本「おこなわ跳びません」

作者・赤羽じゅんこ

絵・マコカワイ

出版社・静山社

★市長賞

「ありのままを受け入れる心」

益田永島学園明誠高等学校 3年

井川 夏凜さん

「頭がもつと良かったらいいのに。」誰もが一度は思つたことがあるはずだ。受験生の身である私は常に思つている。勉強がうまく進まない時や、周囲と比べて自分が劣つていると感じた時、「もつと賢くてできる人間だ

「つたら。」と強く思う。私にとってこの本は、自分自身の弱さや悩みと向き合わせてくれる、そして受け入れさせてくれる物語だった。

この本は、知的障害を持つ主人公チャーリーが手術によって天才的な頭脳を手に入れるところから始まる。最初は平仮名だらけで文法も間違っているような経過観察の日記が、手術を受けてから徐々に漢字を使い難しい言葉も使って流暢に書かれていく様子に、私もチャーリーの変化を感じた。しかし一方で、知能が高まるにつれてチャーリーは周りの人との溝を感じるようになる。今まで仲良くしてくれる職場の仲間だと思っていた人達が自分を馬鹿にして笑っていたことに気づき、孤独を感じるようになってしまふ。この場面はとも心が痛み、頭がいいということも必ずしも幸せにつながるわけではないということを理解させられた。

に大切なことは他人がどうこうではなく自分自身を見つめ、どう受け入れられるかということだと思ふ。

特に印象に残ったのは、チャーリーが知能を得た後、恩師のニーマー教授や周りの人を見下すような態度をとってしまうところだ。以前の自分を愚かだったと評価し、周りの人を理解力のない人だと切り捨ててしまふ。また、元に戻るかもしれないという恐怖や焦燥感で余裕を失い、チャーリー本来の間らしい優しさを忘れていたところを見て、やるせなさを感じた。知能があってもなくても、チャーリーはチャーリーであることに変わりないのに、「頭のいい自分」しか認められなくなりとらわれていた。この部分は、自分の弱さを受け入れられない私とよく似ているなと思つた。

その後、手術で得た知能は永遠ではないと知ったチャーリーはまた元の自分に戻っていく。永遠ではないのと知れたのも自分の頭脳があったからなのだ。とても皮肉だと思つた。この場面のチャーリーの気持ちは想像するだけでしんどくなってしまう。天才的な頭脳を手に入れ、難しい論文も読むことができ、書くこともできるようになっていく。自分が築いたはずのものがどんどん分からなくなっていく。

く。そんな恐怖を抱えた中でもチャーリーは最後に「アルジャーノンに花束を」と書き残す。実験の犠牲になつた小さな白ネズミのアルジャーノンへの思いやりの言葉だ。この言葉から私はチャーリーの本来の優しさや温かさを感じた。頭が良くて悪くても根底の優しさは変わっていないなかつたのだ。

この結末から私は悲しさや切なさを感じると共に安堵のような感情も抱いた。チャーリーは知能を得ても失つても、他者を思いやる心を持っていた。これこそが本質であり、「人としての価値」は他人と比べて優れているとか、頭がいいとかではなく、どう生きてどう周りに関わりを持つかにあると思つた。

読んだ後に私は自分自身のことを考え見つめ直した。私は様々な場面で人と比べて落ち込んだり塞ぎ込んで「ありのままの自分を受け入れることの大切さ」を教えられた。現実ではチャーリーのように急に頭がよくなることはありえない。だからこそ私たちは「今の自分」を受け入れ、自分で成長していけるかということが大事だと思う。欠点や弱さは人間誰しもあると思うが、それを自分の一部だと認め、大切にして生きることが幸せにつながるのだと思ふ。

また、周囲の人との関わり方についても考えさせられた。チャーリーは、知能を得る前から、からかわれながらも周りの人とうまくやっていった。しかし頭が良くなつてからは孤立し、誰にも理解されないと心を開かなくなつてしまった。人は他者との関係の中で生きていく存在である。だからこそ優しさや思いやりを忘れてしまえば、たとえ人より優れていても孤独になる。裏を返せば、相手を尊重し、ありのままを受け入れる心を持つていけば不完全な自分でも大切に生きられる。私はこれから「相手のありのまま」にも目を向けて心がけていきたい。そして自分の不完全さも徐々に認めていけるようになっていきたい。

※読んだ本

「アルジャーノンに花束を」
作者…ダニエル・キイス
出版社…早川書房

